

『古代日本語、古代琉球語の対格接語の形成について』 : その1 : 日本 [・琉球]祖語の復元

板橋, 義三
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5453>

出版情報 : 言語文化論究. 9, pp.209-223, 1998-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :

『古代日本語、古代琉球語の対格接語の形成について』

— その1：日本〔・琉球〕祖語の復元 —

板橋 義三
(アジア・アフリカ部門)

キーワード：中央語、方言、祖語、強調、混合性

序

古代日本語・琉球語の対格接語〔=対格助詞〕の起源についてはこれまでいくつかの論文が発表されているが、その方法論については様々な問題をはらんでいた。拙論ではまずこれらの論文に関する問題点を再考する。古代日本語と古代琉球語との共通形〔祖語〕を方言形の比較を通して内的復元し、それを周辺の言語と比較方法によって比較することにより、その形成過程を構築する。またここでは日本〔・琉球〕祖語という用語を使用するが、この用語は一般に比較言語学で用いられている意味では『地理的に広範囲にわたって統一された原言語体』という意味である。しかし、ここでは『ある過去の一時期に、日本全土に渡って行われた統一言語体ではなく原始社会における政治・経済などの中心地域で行われた日本〔・琉球〕統一言語体』という意味で用いている。というのは当時の日本の地域によっては異なった言語や方言が話されていたことがわかっており、その比較言語学で用いる意味での日本〔・琉球〕祖語は考えにくいのではないかと思われるからである。

またItabashi (1988) ではこの対格接語の起源をアルタイ比較言語学の立場から、アルタイ祖語に求め、日本語のすべてまたはほとんどの言語学的レベルにおいてアルタイ語族に帰属するという「起源」の立場を取ったが、この見解は事実を正しく反映しているとは考えにくく、その「非起源性」の証拠が挙がってきた (cf. 板橋：1998)。またそれとともに日本語の混合性が強く考えられるため、「起源」ではなく「形成」という言葉に改めることにする。さらにこれまでの接触言語学の成果 (cf. S. Thomason & T. Kaufman：1989) を見ると、このような接辞が言語接触によって借用されるという形式だけでなく、言語の中核的な部分を借用し他の部分はそのまま残在、使用されるという、単に語彙などの借用という程度に停まらない、いわゆる混合言語の素地が形成されることが数多くの混合言語の歴史的研究からわかってきた。従って、ここでは言語混合 (language mixing) の立場からこの問題を見直し、日本語の格接語の混合性をも考えてみる(その2参照)。

本論

[1] 古代日本語の対格接語の音価

これまでの論文ではこの音価に関しては全く議論されずに単に *wo* であるという前提で

もって比較されて来た(松尾 1944: 617-44; Murayama 1957: 130; 村山1973: 153-6; Miller 1971: 26-7)。しかし、Miller (1977: 163-4) で初めてこの音価を探求し、その後Itabashi (1988: 195-6) でこの音価を中期中国語と比較しながら追求して来た。ここでは古代日本語の対格接語の音価を *wo と復元したが、これはさらに遡れば *wo₂ と復元できる可能性がある。それは感嘆詞接語 wa や強調接語 mo₂ が語彙、意味、形態、統語のすべてのレベルにおいてこの対格接語と深い関係にあったと考えられるからである (cf. 村山 1973: 155-6)。また古代日本語では母音 o₂/o と a とは交換可能なものであった。しかしながら、この母音 o₂ と o の区別は音韻レベルの問題ではなく音声レベルの問題であると考えられる。即ち、二つの異なる音素の区別ではない。その区別は同音素の二つの異音としてであったろうし、その異音も過渡的なものであったと思われる。(従って、8母音説は事実の反映だとは言えないと思われるが、ここではそれについて論じることはこの拙論の目的ではないので扱わない)。従って、ここではその区別をすること自体にあまり大きな意義を見出さない。これに対して、R. Miller (1993: 232) は8母音説を取り母音調和の問題に絡んで o₂ と o は異なる音素と考え、古代日本語では母音 o₂ は w-の直後では現れず、母音 o しか現れないという。しかし、確かに古代日本語では wo₂ となる形態素は非常に少ないが、全く存在しないということではなく異音として存在した形跡がある(松本 1995: 105-9)。ここでは表記上も音価上もその母音を wo [wo] としておく。事実この異音の区別もほとんど消失しつつあったのではないかと思われる。

[2] 古代日本語の対格接語形からの原日本 [・琉球] 語の対格接語形の復元

古代日本語の中央語として使われたと考えられる対格接語は wo であり、また古代語の方言として唯一残っている東国方言でも wo である。その例をいくつか挙げる：

中央語：

- 1) あをまつと きみがぬれけむ あしひきのやまのしづくに ならましものを [万 108]
あをまつと きみがぬれけむ あしひきのやまのしづくに ならましものを
「私を待つと君が濡れたという [枕詞] 山の雫に 私がなれたらよかったのに」 [対格]
- 2) さよひめがこのやまのへにひれをふりけむ [万 872]
さよひめが このやまのへに ひれをふりけむ
「佐用比賣が この山の上で 領巾を振ったのだろうか」 [対格]
- 3) ころもでのなぎのかはべをはるさめに われたちぬるといへおもふらむか [万 1696]
ころもでの なぎのかはべを はるさめに われたちぬると いへおもふらむか
「[枕詞] 名木川の川辺で 春雨に 私が濡れていると 家の者は思っているだろう」 [浴格]
- 4) あまごかるひなのながじをこひくれば... [万 3608]
あまごかる ひなのながじを こひ くれば
「[枕詞] 田舎の長い道中を [故郷を] 恋しく やって来れば」 [浴格]
- 5) あしひきのやまよりいづるつきまつと ひとにはいひていもまつわれを [万 3002]
あしひきのやまよりいづるつきまつと ひとにはいひていもまつわれを
「[枕詞] 山から 出る月を待っていると 人には言って、 [会う約束をした] 妹を待っている私です」 [詠嘆]

- 6) かがなべて よにはここのよひにはとおかを [古事記 中巻 26: 景行]
 かがなべて よにはここのよ ひにはとおかを
 「日を重ねて 夜は九夜、 日は十日になります」[詠嘆]
- 7) うつせみのひとめしげけばぬばたまのよるのいめにをつぎてみえこそ [万 3108]
 うつせみの ひとめ しげけば ぬばたまの よるのいめにを つぎて みえこそ[強調]
 「世間の 人目が 多いので [枕詞] 夜の夢に 続いて 現れてください」

東国方言：

- 1) かづしかのままのうらみをこぐふねの... [万3349]
 かづしかのままのうらみをこぐふねの
 「葛飾の真間の浦みをこぐ船の...」[対格]
- 2) わがせこをあどかもいわむ... [万3379]
 わがせこをあどかもいわむ
 「恋しい人をなんといおうか」[対格]
- 3) ひのくれにうすひのやまをこゆるひは... [万3402]
 ひのくれに うすひのやまをこゆるひは
 「[枕詞] 碓氷の山を越える日には...」[沿格]
- 4) わすれくるいもがなよびてあをねしなくな [万3362]
 わすれくるいもがな よびて あをねしなくな
 「忘れようとしてきた妹の名を 口にして呼んで 私は泣いてしまった」[強調]
- 5) たれそこのやのおそぶるにふなみにわがせをやりていはふこのとを [万3460]
 たれそこのやのおそぶる にふなみにわがせをやりていはふこのとを
 「だれがこの家の戸をがたがたさせるのは。新嘗祭に夫を外に出しているこの戸は」[詠嘆]

中央語では動作や情意の対象を強調的に表し、また強調表示のみの接語としても詠嘆のみならず、所謂、間投助詞と呼ばれる上記の例7)のような斜格接語によるその直前の名詞の強調などにも使用された。東国方言でも基本的には同じで接語 *wo* には対格と沿格の格機能、そして強調と詠嘆の強調機能が存在したことが上例から分かる。

しかしながら、*ba* も古代日本語の時代には存在していた。それは一般に係助詞 *Fa* の有声化したものと言われているが、*ba* に有声化したとすると、次の点が問題になる。

- 1) どうして格接尾辞 *wo* を取るときだけ *ba* に有声化したのか、音韻、形態、統語的観点からは説明が不可能である。
- 2) *F*-が *b*-に有声化したという他の例がないだけでなく、日本語では逆の無声化が史的には一般的であるが、これをどのように説明するのか。

従って、この *ba* は係助詞 *Fa* が有声化したものではないと考えられる。ここでさらに問題1)との関係で、*wo* をとる時だけ *ba* の付加が可能だったことから、これは後の対格接語に代表される *ba* ではないかと考える。この古代日本語の時代にはすでにその主な機能は「強調」になってしまっていたのではないか。対格の接語 *wo* の直後にのみ付加され、その統語上から対格の機能も非常に薄れてはいたものの、存在していたと言える。その例をいくつか挙げる。

強調としてとる接語 *ba*

- 1) あをきを**ば**おきてそなげく [万 16]
あをきを**ば** おきてそ なげく
「青いものを そのままおいて 嘆息する」
- 2) いもを**ば**みずそあるべくありける [万 3739]
いもを**ば** みずそ あるべくありける
「恋する人に 逢わずに いるべきであった」
- 3) そのなを**ば**おほくめぬしとおひもちて [万 4094]
そのなを**ば** おほくめぬしとおひもちて
「その名を 大来目主と呼ばれて」

以上の例から東国方言でも中央語と変わらず対格接語を *wo*、そして対格接語直後 *wo* に添加する強調接語を *ba* とすることができる。これをまとめて、古代語のみからはその原日本〔・琉球〕語をつぎのように復元することができる。

原日本〔・琉球〕語	古代中央語	古代東国方言
* <i>ba</i> / * <i>wo</i> ₂	<i>ba</i> / <i>wo</i>	<i>wo</i>

さらに上の *wo* の例が代表例と考えられるが、これらからこの接語は対格のみを表すのではなく沿格をも表したこともすでに述べた。それは古代東国方言も例外ではなく、この古代日本語の対格接語は主に *wo* と副次に *ba* であったと考えられる。その前者の格機能も対格と沿格の二つであった（詳細は Itabashi 1988: 196-201）。ここで特に沿格について留意する点はこの格では現代語と同様に自動詞と他動詞に区分するのであれば、この格の後には自動詞のみを取ると言うことであり、それが対格をとる動詞と異なる点でもあるということである。また、上例の中央語の 5) と 6) と東国方言の 4) と 5) から分かるように、古代中央語だけでなく東国方言にも強調・詠嘆機能が存在した。この二つの機能の違いは統語的な点にあり、強調の機能では文中に現れるときにその直後にくる動詞が一般に格接語を取るものである。これに対して詠嘆の機能をもつ接語では文末に現れるという特徴を有する。しかしながら、この二つの機能は本来同じ機能であり、「詠嘆」は広い意味で「強調」という機能に含まれる。これをまとめると次のようになる。

接語 *wo* の機能：①格機能：対格と沿格 ②強調機能：強調と詠嘆

接語 *ba* の機能：①強調機能：強調

〔3〕古代琉球語の対格接語形からの原琉球語の対格接語形の復元

古代琉球語の代表である「おもろさうし」（成立年：巻一：1531年；巻二：1613年；巻三以下：1623年～）には対格接語 *yo* が見える。まずいくつかの例を示す。

- 1) あすもりの よもつすで みつ**よ** みおやせ [おもろ 255]
あすもりの よもつすで みつ**よ** みおやせ
「安須社の 世を守護し支配する躰で 水を 差し上げなさい」[対格]

- 2) おもひぐわす とひやくさよ ちよわれ [おもろ 256]
 おもひぐわす とひやくさよ ちよわれ
 「愛児こそ 永遠に いてください」[強調]
- 3) はひやよ とよでて まへちへ はひ [おもろ 492]
 はひやよ とよでて まへちへ はひ
 「はひや、どけと言って 前の方へ」[詠嘆]

「おもろさうし」よりそれぞれ一例ずつ挙げたが、これらの例からも *yo* の機能が少なくとも2つあり、古代日本語の *wo* とほぼ同じ機能を持っている。またここでは沿格機能の例が見られないが、ほとんど間違いなくこの沿格機能もあったものと予想される。

接語 *yo* の機能：①格機能：対格 ②強調機能：強調と詠嘆

しかし、また近代語である琉歌（1795年～）や組踊（18世紀）に *wo* がいくつか見られ、これは日本語からの借用ではないかと考えられる。それに対して、古代琉球語に本来 *wo* が存在したと仮定すると、現代語のような明確な対格接語としてだけでなく、強調の機能をも持ち合わせている。その例をいくつか挙げる。

- 1) あすが あさましや しよく これを がいす [南島歌謡大成 I 沖繩篇 下：琉歌全集
 あすが あさましや しよく これを がいす 2926]
 「長老の 浅ましいことよ 私欲が これを 害する」[対格]
- 2) みちを ゆくひとも うたよ うたて [南島歌謡大成 I 沖繩篇 下：琉歌全集 619]
みちを ゆくひとも うたよ うたて
 「道を行く人も 歌を 歌って」[沿格]
- 3) のよで てらうちを かそうに 入れる [琉球戯曲集 執心鐘入 64下]
 のよで てらうちを かそうに 入れる
 「のよで 寺内を 龕相に 入れる」[強調]

上記の3例から *wo* が古代日本語の *wo* とほとんど同じ機能を持ち合わせていたことが分かるが、これは多分借用であろう。その判断の理由は古代琉球語には対格接語 *yo* が存在しており、その直系の対格接語 *yu* が現代琉球方言に残存しており、*wo* はその中間の時期に急に出現し、その後も現代方言に継承されていないためである。

しかしながら、これと機能を同じくする接語 *ba* の例が2、3見られる。

- 1) ゆかる日ばいらび... [南島歌謡大成 I 沖繩篇 上：古歌謡 ウムイ422-1]
 ゆかる日ば いらび
 「よい日を えらんで」
- 2) あがと沖繩とこがと八重山と肝のふれものや縁ば結で [南島歌謡大成 I 沖繩篇下：
 あが と 沖繩と こが と 八重山と 肝のふれものや 縁ば結で 琉歌全集1293]
 「あんなに 遠い沖繩と こんなに 遠い 八重山と 気のとられた人が 縁を結んで」

これらの例の出典の成立年は近世（1609年以降）になってからであり、より正確には17世紀末から18世紀初期の間であり、古琉球時代の文献ではないが、これまでに存在確認の可能な最も古いものであると考える。例の1、2ともに対格接語として機能していると考えられる。ここで文献から原琉球語の対格接語を**ba*と**wo*と考えられる可能性が大きいので、次のような歴史的な変化があったと考えられる。原琉球語の一つに**wo*を立てるのは次のような理由による。

- 1) 琉球語と日本語は姉妹言語であり、兄弟関係にある。
- 2) 対格接語は原琉球語〔即ち原日本・琉球語から分岐した直後〕ではまだ**wo*という形態を残していたはずである。
- 3) 琉球語内で *w-*は *y-*に音声的变化をしたという証拠がある。
- 4) 近世琉球語に見られる *wo* は借用として問題がない。この時期にはすでに *yo/yo* に変化したと同時に原琉球語の**wo*は残存しておらず、借用した *wo* と競合することはない。

従って、文献以前の琉球語の対格接語は次のように復元できる。

原琉球語	古代琉球語	近世琉球語
* <i>ba</i> * <i>wo</i>	* <i>ba</i> <i>yo</i>	<i>ba</i> <i>yo/yo</i>

[4] 現代日本語方言形からの対格接語形の復元

現代日本語の共通語ではその対格接語は *o* であるが、これは方言ではこの形態素をもたないところが多い。まず *ba* を取る代表的な地域方言と例を一つずつ挙げてみる (cf. 日本方言大辞典 下巻 1989:1872; 東條操編 1951 全国方言辞典)。

① *ba* を対格接語としてとる方言：

- | | |
|---|--|
| <p>1) 青森県上北郡
それ<u>ば</u>すてる
それ<u>ば</u> すてる
「それを すてる」</p> <p>3) 岩手県気仙郡
つごうがあるがら、おれ<u>ば</u>あでにするな
つごうがあるがら、おれ<u>ば</u> あでにするな
「都合があるから、俺を あてにするな」</p> <p>4) 秋田県雄勝郡
ちゃ<u>ば</u>のんでさげ<u>ば</u>のまね
ちゃ<u>ば</u> のんで さげ<u>ば</u> のまね
「茶を 飲んで 酒を 飲まない」</p> <p>6) 宮城県名取市
ほん<u>ば</u>なしてなげる
ほん<u>ば</u> なして なげる
「本を どうして すてる」</p> | <p>2) 岩手県胆沢郡
し<u>ば</u>でーずにしんだでや
し<u>ば</u> でーずにしんだでや
「火を 大事にするんだよ」</p> <p>5) 山形県村山地方
あい<u>づ</u>み<u>ば</u>み<u>つ</u>ともどすだぐなる
あい<u>づ</u>み<u>ば</u> み<u>つ</u>ともどすだぐなる
「あれを みると 嘔吐したくなる」</p> <p>7) 福島県北部
これー<u>ば</u>よごした
これー<u>ば</u> よごした
「これを よこした」</p> |
|---|--|

8) 茨城県東南部

これーばよごしたこれーば よごした

「これを よこした」

9) 千葉県香取郡

ごっつおはねーどもさげばのんでくだせーやごっつおは ねーども さげば のんでくだせーや

「ごちそうは ないけれども 酒を 飲んでくださいね」

10) 東京都神津島

ごっつおはねーどもさげばのんでくだせーやごっつおは ねーども さげば のんでくだせーや

「ごちそうは ないけれども 酒を 飲んでくださいね」

11) 新潟県岩船郡

ごっつおはねーどもさげばのんでくだせーやごっつおは ねーども さげば のんでくだせーや

「ごちそうは ないけれども 酒を 飲んでくださいね」

12) 山梨県南巨摩郡

はやりうたーばうとーどがむかしのうたーわうたいえーのーどーはやりうたーば うとーどが むかしのうたーわ うたいえーのーどー

「流行歌を／は 歌うが、 昔の歌は 歌えないのだ」

13) 福岡県三井郡

なんばするとねなんば するとね

「なにを するんだ?」

14) 五島列島 [郡家 1976: 110]

どこぞじてんしゃばかしたっじゃろよなどこぞ じてんしゃば かしたっじゃろよな

「どこかに 自転車を 隠したんだろうね」

15) 佐賀県

なんばするかななんばするかな

「なにをなさいます?」

16) 宮崎県西臼杵郡肥筑地域 [原田 1972: 53]

①くりばひろうた ②めしばくうくりばひろうた めしばくう

「栗を拾った」 「飯を食う」

17) 鹿児島県薩摩 [上甑村、下甑村、里村、鹿児島郡] : [橋口 1987: 647]

えだばおるえだば おる

「枝を 折る」

② *ba* を沿格接語としてとる方言

1) 五島列島 [郡家 1976: 110]

わたしもうまれっはじめっけいさつんもんばくぐったっよなわたしもうまれっはじめっけいさつんもんばくぐったっよな

「私も生まれて初めて警察の門をくぐったんだよ」

- | | |
|---|---|
| 2) 福岡県福岡市
そのは <u>しば</u> わたって...
そのは <u>しば</u> わたって...
「その橋を 渡って」 | 3) 佐賀県伊万里市
そのみち <u>ば</u> とおっていくと
そのみち <u>ば</u> とおっていくと
「その道を 通っていくの」 |
|---|---|

③ *ba* を強調接語としてとる方言：[上の語句を強調]

- 1) 岩手県胆沢郡
かせどりにばあるがねけすだが
かせどりにば あるがねけすだが
「正月の餅貫いの行事には 歩きませんでしたか」
- 2) 東京都神津島
うみいばいかないな
うみいば いかないな
「海へは 行かないのか」
- 3) 島根県大原郡
ひとよばさきいきとらんと
ひとよば さきいきとらんと
「人よりも 先に行っていないと」

これらの例からわかるように、古代日本語の時代の中心であった奈良や京都などの関西地方を円の中心にそれから遠ざかるに従い、対格接語の *ba* の存在が確認できる。[ここで断っておくが、方言圏論を提唱しているのではないが、この接語に関しては圏的であると言える。] 即ち、東北、関東、北陸、東海道の一部など東日本全体に存在していた接語であると考えてよい。また西側では九州一帯に存在していることが確認できる。その機能は強調的な対格を表すことにあり、従って、一般には九州方言を除いてはこの接語は表示されないことが多い。さらに下記に述べる琉球語では沖縄方言[今帰仁方言を除く]を除いた琉球方言では *ba* をとると共に、奄美方言と沖縄方言[今帰仁方言を除く]の北琉球を除き南琉球方言では *yu* も取る。沖縄方言[今帰仁方言を除く]で *ba* も *yu* も一般に使われないが、これは *ba* も *yu* も本来は存在していたのが何らかの理由によって消失したものと思われる。

また沿格接語の *ba* は例が非常に少ない。現段階では東北の方言にはその例を見いだせないが、それでも対格接語の用法の分布の傾向と軌を一にしているようであり、用例が増えるに従って、その傾向が明確に見えてくるとと思われる。この用法には起点と経由点を表す2つの用法があるが、ここでは後者のみの例しか挙げていない。が、実際には起点の用例もあることは *o* や *ba* の機能から対格の用法があれば必ず沿格の用法も存在することからその存在の蓋然性が高い。これから *ba* の機能は次の強調の機能も含めて *o* のもつ機能すべてと完全に重なるであろうことを暗示している。

さらに強調接語の *ba* もその例は少ないが、対格・沿格接語の *ba* とほとんど重なりながら、存在しているようだが、例文(3)は島根県であり、これは中国地方の「東北弁を話す」特別な地域であり、おそらくこれは東北方言の *ba* と直接関係があると思われる。

上述の地域方言から判断できることはその方言地域における現代語の形態はこの二つの

形態素が共存していると見てよいので、これらの地域では *ba* が本来の形態であり、共通語の *o* は後の形態であろうと考えられる。従って、古代日本語の対格接語を考慮せずにこの方言形からのみ2つの方言地域の対格接語を考えると、一貫して **ba* と **wo* とに復元できる。またその機能は強調的な対格表示である。

	関西・中国・四国・ 近畿・中部	東北・関東・北陸（一部）・ 東海道（一部）・九州
現代語〔方言形〕	: <i>o</i>	<i>ba</i>
	↓	↓
古代語〔復元形〕	: <i>*wo</i>	<i>*ba</i>
古代日本語〔実在形〕	: <i>wo</i>	<i>ba</i>

次にこの二つの対格接語が本来異なるものかどうかを見る。現代語では対格接語には *wo* と *ba* が独立して存在しているように見えるが、この二つの接語は形態・統語的にも意味的にも本来同一のものではなかったかという予想も可能である。どちらかがもう一方の発達形であるという考え方ともうひとつは全くどちらでもない形態素からこの二つが発達したという考え方である。原日本〔・琉球〕語の段階を分化が始まった時期の形態と考えると、次の(1)から(3)までの可能性は全くなくなってしまうが、このような分化の始まった時期(4)はほぼ確実に存在したのではないかと考える。

原日本〔・琉球〕語:	(1) <i>*ba</i>	(2) <i>*wo₂</i>	(3) <i>*bə</i>	(4) <i>*ba</i>	<i>*wo₂</i>
	↓ ↓	↓ ↓	↓ ↓	↓	↓
古代日本語:	<i>ba wo</i>	<i>ba wo</i>	<i>ba wo</i>	<i>ba</i>	<i>wo</i>
	↓ ↓	↓ ↓	↓ ↓	↓	↓
現代日本語:	<i>ba o</i>	<i>ba o</i>	<i>ba o</i>	<i>ba</i>	<i>o</i>

まず(1)では本来原日本語に **ba* が存在しそこから *wo* が古代日本語時代にはすでに派生したとするものであるが、この *ba* は古代東国方言にも現れないし、また何らかの接語のようなものから急に近代・現代語で発達したという痕跡は全くないので、この *ba* を原日本語に存在した対格接語として復元することは可能であるが、この形態から *wo* へ発達したとする時、音韻論的にその変化を十分納得がいくように説明するのは難しいであろう。

(2)では(1)と反対の形成順序であるが、まず問題となるのは原日本語の *wo* の *w-*が *ba* の *b-*に変化したという過程であり、それは日本語の歴史的音韻論では全く逆で、このような変化はなかったと考えていい。従って、(2)でこの変化過程を説明できない。

(3)で(1)と異なるのは母音であるが、この原日本語の *bə* の母音は口腔内における調音点はちょうど母音 *o* と母音 *a* の中間である。その点を考慮すると、どちらへの移行も可能であり、また原日本語の子音 *b-*から *w-*への弱化現象は一般的現象と考えられるので、この変化過程が最も確かな説明であると見ることができる。しかし、ここでそれぞれがすでに分化した段階としていることから、これを日本〔・琉球〕祖語に立てた方がより適当である。

(4)で原日本〔・琉球〕語の段階がまだそれぞれが異なった接語をもちながらも、古代日本語の母音交替の傾向から a/o_2 の方が a/o よりも交替しやすかったことによりそれぞれ $*ba / *wo$ と立てた。これはこの段階では形態・統語的に、また意味・語彙的に見て異なった二つの接尾辞と考えることは十分可能であるだけでなくその蓋然性が高い。

これらの見解の中では(4)が最も妥当であると考えられる。なお、上記のように現代語の方言、共通語の o は当然古代日本語の wo から発達した形態である。また、現代語でも時折「をば」と共起することがあるが、これは琉球語の方言形「ば」と「ゆ」の共起形の所で述べるように、 $*wo$ がもつ本来の機能である「強調」の意味が希薄になり「対格」の機能に移行した際に、その穴を埋めるためにそれと同機能をもつ ba が「強調」機能を主にした「対格」をも表し得る表示として機能したものと考えられる。

〔5〕現代琉球語方言形からの対格接語形の復元

まず地域別に接語 ba 、 yu / u の例を挙げながら、その分布を見て行く。

①対格接語としてとる方言：

奄美方言

1) 徳之島方言〔花徳〕

nuga wamba nyuŋa [野原 1986:190-1]

nuga wamba nyuŋa

「なぜ私を見るか」

2) 奄美大島方言〔笠利町〕

?ugaŋan doronandzi namaeba kakuna [野原 1986:190-1]

?ugaŋan doro-nandzi namae-ba kakuna

「そんな所に名前を書くな」

3) 喜界島方言〔柳田／岩倉 1977:267〕

di:ba katŋui

di:-ba katŋui

「字を書く」

沖縄方言

(1) 今帰仁方言〔仲宗根 1983:368〕

du:numunba ŋikangui ?tŋunumun ŋikenditŋi ?anna

du:numunba ŋikangui ?tŋunumun ŋikenditŋi ?anna

「自分のものを使わず他人のもの使うことあるか」

宮古方言〔下地 1979:171〕

(1) yi:yu kakü (2) tŋa:yu kaddzi ku:tidu n:tŋibuta [野原 1986:16]

yi:yu kakü tŋa:yu kaddzi ku:-tidu n:tŋibuta

「絵を描く」 「茶を買って来いと 言っていた」

八重山方言〔宮良 1965:91;289〕

(1) panayu burun (p.91)

panayu burun

「花を折る」

(2) fumutsiyu tabo:ri (p.289)

fumutsiyu tabo:ri

「書物を賜れ」

②沿格接語としてとる方言：

宮古方言 [下地 1979 : 171]

- | | |
|---|---------------------------|
| (1) s̄utumuti pya : pya : ya : yu iduru | (2) mainitsi passu batarü |
| s̄utumuti pya : pya : ya : yu iduru | mainitsi passu batarü |
| 「つとめて 早く 家を出る」 | 「毎日 橋を渡る」 |

③強調接語としてとる方言：

沖縄方言

- 1) 今帰仁方言 [仲宗根 1983 : 368]

aga fuba otsukaefi...
 aga fuba otsukaefi
 「我主に 御仕えし...」

宮古方言 [下地 1979 : 171 ; 177]

- | | |
|--|---------|
| (1) kanu i : yuba : bagadu kakitar | (p.177) |
| kanu i : -yu -ba : ba-ga-du kakitar | |
| 彼の 絵をば 私がぞ 描きたる | |
| 「彼の絵を私が描いた」 | |
| (2) umuiurukutu : ba : aii ibadu zo : karu | (p.177) |
| umuiurukutu- : -ba : aii ibadu zo : karu | |
| 思い居ることを ば 言えば ぞ 善かる | |
| 「思い居ることを言えば善かった」 | |
| (3) ikĩtakarü p ^s tu : ba : m : na sa : riiki | (p.171) |
| ikĩtakarü p ^s tu- : -ba : m : na sa : ri iki | |
| 「行きたがる 人 をば 皆 連れて 行け」 | |
| (4) saburo : yuba : ikĩtagarabam sa : riiküna | (p.171) |
| saburo : -yu -ba : ikĩtagarabam sa : ri iküna | |
| 「三郎 をば 行きたがるとうも 連れて 行くな」 | |

これまでの例を地域ごとに分類すると、現代琉球語では現代日本語の共通語と同形態の *o* の他に、地域によって二つの方言形が使われている。それは *ba* と *yu/u* である。その分布は次のようになる (野原 1986 : 16) :

奄美方言	沖縄方言	宮古方言	八重山方言
<i>ba</i> なし	*なし *なし	<i>ba yu/u</i>	<i>ba yu/u</i>

* : 今帰仁方言 (沖縄方言の一つ) では通時的に化石化した *ba* と *yu* がある

今帰仁方言を除く沖縄方言のみで *ba* をとらず、その他の方言 (奄美方言、宮古方言、八重山方言) ではすべて *ba* をとる。この分布から沖縄方言でも *ba* が使われていたと考えられ、それが何らかの理由により消滅したと考えてよいと思われる。それに対して、*yu* は南琉球方言で使用され、北琉球方言 (今帰仁方言を除く沖縄方言、奄美方言) では使われない。これは現代日本語方言の対格接語の機能と全く同じであり、そのどちらにしてもそ

の機能は強調的な対格表示であり、特に強調されない場合はこの接語は添加されない。

上述の接語 *yu* に関しては、北琉球方言では本来使われていたものが、なんらかの理由により使用されなくなり、その傾向が沖縄方言に顕著に表れることから、その使用されなくなった原因はこの方言に見いだされるのではないかと思われる。また、*u* は *yu* の半母音が脱落した形態であることを付け加えておく。

また、*ba* と *yu* が共起する場合は上記の例からも分かるように、必ず *yu - ba* という順序であり、その逆ではあり得ない。また南琉球方言では対格表示は主に *yu* だけで表されるので、*ba* は付随的なものとも考えることも可能である。つまり、この *ba* が添加可能になった時期にはすでに *yu* の対格・強調機能がほとんど消失してしまい、それに取って代わるように *ba* が付け加えられたのではないかと考えられる。しかしながら、その時点で *ba* は *yu* の全機能を備えていることから、例えば、他の格 [奪格、主格など] を表示することはないので、この接語 *ba* が漠然とした強調接語ではないことも理解できる。即ち、その前の体言の格を特に強調指定することになり、対格または沿格を表すようになったと考える。しかし、この見解によれば、*yu* が格機能も強調機能も失い、その意味における存在意義はなくなってしまい、この接語が単に直前の名詞の一部になってしまうということを述べているのと同様である。しかし、そのような証拠は全くないので、この見解は正しいとは言えない。従って、ここで考えられる見方は *yu* の機能が「格」表示に偏ってしまい、「強調」の機能が消失したのではないかという見方である。この *yu* の一度消失した「強調」機能は回復しないため、それを同様の機能をもつ *ba* が代行することになるが、その場合の機能は「強調」を主とし、対格・沿格機能を従とするものであろう。

さらに一般に言えることであろうと思われるが、格が既に指定してある場合 [*ba* と *yu* が共起] には、*ba* を格指定の接語とか強調の接語とかというような二者択一的な選択ではなく、どちらの機能も保持しながらここでは強調機能がより前面にその機能を表出すると考えるのである。このように考えることでこの二つの異なった機能が対峙せず、逆に共存関係を保持し、発達して行く過程が理解できる。

次に形態的に問題となるのはこの二つの形態の発達過程である。つまり、この二つはどちらかが本来の形態であり、もう一方がそれから発達したとする見方、またもう一つはその本来の形態が全く別なものであり、それからそれぞれ *ba* と *yu* とに派生したとする見方である。

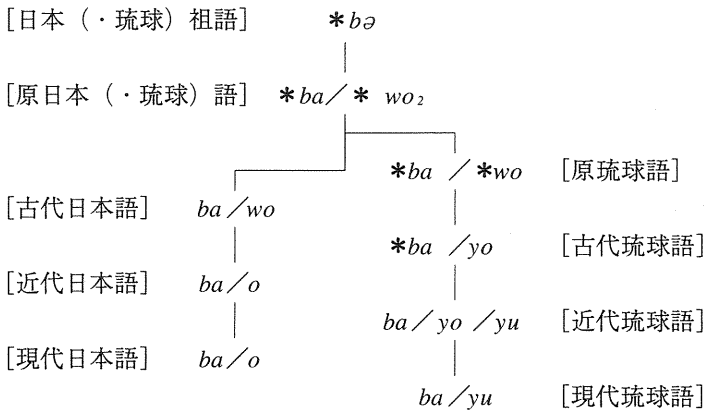
原琉球語	:	(1)	<i>*ba</i>	(2)	<i>*wo</i>	(3)	<i>*bə</i>	(4)	<i>*ba</i>	<i>*wo</i>
			↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
古代琉球語	:	<i>*ba</i>	<i>yo</i>	<i>*ba</i>	<i>yo</i>	<i>*ba</i>	<i>yo</i>	<i>*ba</i>	<i>yo</i>	<i>yo</i>
		↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
近代琉球語	:	<i>ba</i>	<i>yu</i>	<i>ba</i>	<i>yu</i>	<i>ba</i>	<i>yu</i>	<i>ba</i>	<i>yu</i>	<i>yu</i>
		↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
現代琉球語	:	<i>ba</i>	<i>yu</i>	<i>ba</i>	<i>yu</i>	<i>ba</i>	<i>yu</i>	<i>ba</i>	<i>yu</i>	<i>yu</i>

音韻論的な変化であるが、近代語の *yu* が古代語の *yo* から変化したものであることは一般に認められているが、この *yo* はさらに **wo* に遡ることが考えられる。それは琉球語の3母音の時代から遡るに従って、5母音体系に戻ると考えられるし、また琉球語のこの接語の母音 *u* は *o* に遡り、さらに古代日本語では *wo* が対応するため、**wo* になると考えられる。

るのである。確かにこの復元形は5母音時代が琉球語に初期の段階では存在したということがあくまで前提となるが、この母音体系がこれまでの問題点を非常に明解に処理しているように思われる(松本 1995:130-146)ので、古代日本語の母音体系からも最も有力な候補と考えられる。

現代日本語の方言形からの復元形でも見たように、上述のことを前提として考えると、(1)から(3)はその妥当性を持たない。この3つの見解で最も妥当性があると思われる(3)でも、八重山(与那国を含む)方言では/w-/から/b-/への変化が見られるが、これはこの方言特有の変化であり、他の琉球方言では/b-/から/w-/への変化である。さらにもし日本語と琉球語にまだ分派していない原日本[・琉球]語の段階で*baと*wo₂に分離していなかったとすると、この分離は琉球語中で起こった特有の変化と考えなければならず、古代日本語にもすでに起こっていた同じ変化を別々に説明しなければならない。しかし、それはこの時点では不可能であるといわざるを得ない。従って、逆に(4)のように、日本語と琉球語に分派する以前にすでに*baと*woに分離していたとすると、日本語と琉球語とで別々に同じ変化が生じたのではなく同じ変化が日本語と琉球語に同時に継承されたのであり、琉球語内の変化のみ[*wo→yo→yu]を考慮すればよい。従って、より単純な変化であり、言語変化の効率から考えられると、このような変化が生じたとするほうがより好ましいのであり、この(4)の見解が最も有力な候補であると考えられる。

[6] 古代日本語／琉球語、現代日本語／琉球語の方言からの日本(・琉球)祖語の復元



日本語に関して述べると、*ba / wo*の意味するところは*ba*または*wo*が地域によってどちらかを主に使用した、即ち、/(斜め線)は地域差と言う意味を基本的に表している[時代が下がるにつれて、現代日本語や現代琉球語では共通語としての*o*がかぶさったことに関してはここでは問題とならない；このチャートでの現代日本語の*o*は一つの方言形としてのものである]。

琉球語に関しては、現代琉球語では*ba*と*yu*がほとんど重なって同じ地域で併用されているので、これは地域差というよりは時代差によるものであろう。時代が上ってもこの二つの異なった形態を持ちその主たる機能が異なってきたために同じ地域でこの二つの形態を持つに至ったのではないかと考える。例えば北琉球語では*yu*が消滅したため、*ba*が格

と強調の両方の機能を同じ比重で果たすことになったのではないかと予想する。従って、日本語と琉球語ではこの二つの接尾辞に分離した後はその発達過程は異なっている。即ち、日本語では *ba* と *(w)o* を継承しているのに対し、琉球語では *ba* はそのまま継承されたが、*wo* は形態を *yu* に変化させ継承されていると考えられる。

原日本〔・琉球〕語において **ba* と **wo₂* に分化したと考えられる理由は上述の日本語のところで述べたように、おそらく地域差に根差しているのではないかということである。特に方言に見られるような *ba* と *(w)o* の偏在はそれを物語っているのではないかと思われる。この地域差はその地域の土着言語との接触により変化した可能性とその言語内での内的な変化の可能性の二つの見解があるが、その当時の日本列島の言語分布の状況を考えてみると、多分に多種多様な言語や方言が話されていたと考えてほぼ間違いないと思われるので、この二つの見解の前者がより事実と則した見解ではないかと思う。しかしながら、日本語内にはそれを裏付けるだけの資料は存在しないので、これを傍証するには外的な資料によるしかない。

日本〔・琉球〕祖語において言えることは、分化した二つの接語は本来一つの接語であったろうということであり、それは上述のように形態的にその分化を可能にする形態、即ち、**bə* という形態をもっていたであろうと予想されるのである。この形態が近隣の諸言語と比較される日本〔・琉球〕祖語の形態であり、その 2 でその比較を見ることにする。

"On the Origin of the Old Japanese and Old Ryukyu Accusative Case Enclitics"

-(1)A Reconstruction of the Proto-Japanese-Ryukyu Accusative Case Enclitic-

Yoshizo Itabashi

This paper is an attempt to reconstruct the Proto-Japanese-Ryukyu Accusative Case Enclitic. The reconstruction was made on the basis of the data from Old Japanese and Ryukyu as well as from the modern dialects in both languages. The Proto-Japanese-Ryukyu Accusative Case Enclitic must have been **bə*. This conclusion has been reached from the fact that Old Japanese had *wo* and many modern dialects have *ba* and also Old Ryukyu had **ba* and *yo*.

文 献

1. 板橋義三 1998「古代日本語、古代琉球語の対格接語の形成について：－その2：比較方法による比較－」『言語科学』1998 第33号
2. 板橋義三 1998「日本語・琉球語、アイヌ語の代名詞と指示・強調詞体系の比較研究」(仮称)
3. 郡家真一 1976「五島方言集」国書刊行会
4. 下地一秋 1979「宮古群島辞典」自家出版
5. 仲曾根政善 1983「今帰仁方言辞典」角川書店
6. 仲原善忠、外間守善 1965「校本おもろさうし」角川書店
7. 仲原善忠、外間守善 1967「おもろさうし辞典／総索引」角川書店
8. 野原三義 1986「琉球語の助詞の研究」武蔵野書院
9. 橋口満 1987「鹿児島県方言辞典」桜風社
10. 原田欣三 1972「西臼杵方言考」高橋書店
11. 松尾拾 1944「客語表示の助詞「を」について」橋本博士還暦記念会編 国語学論集 岩波書店
12. 松本克巳 1995「古代日本語母音論」ひつじ書房
13. 宮良当杜 1965「八重山語彙」東洋文庫
14. 村山七郎、大林太良 1973「日本語の起源」弘文堂
15. 柳田國男、岩倉市郎 1977「喜界島方言集」国書刊行会
16. —— 南島歌謡大成I 沖縄編 上下
17. —— 万葉集I, II, III, VI, 日本古典文学大系、岩波書店
18. —— 日本方言大辞典 下巻
19. —— 琉球戯曲集 執心鐘入
1. Itabashi, Yoshizo, 1988, "A Comparative Study of the Old Japanese Accusative Case Suffix *wo* with the Altaic Accusative Case Suffixes", *Central Asiatic Journal* Vol.32, No.3-4
2. Itabashi, Yoshizo, 1989, "The Origin of the Old Japanese Accusative Case Suffix *i*", *Ural-Altische Jahrbücher*, Neue Folge, Band 9
3. Miller, Roy, 1971, *Japanese and the Other Altaic Languages*, Chicago: University of Chicago Press
4. Miller, Roy, 1977, "The Altaic Accusative in the Light of Old and Middle Koren", *Proceedings of the 19th Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference Held in Helsinki, 7-11 June 1976*, MSFOu 158, 157-169.
5. Miller, Roy, 1993, "More on the Old Japanese and Old Korean Accusatives", *UAJB Neue Folge Band 12*, pp.230-9
6. Murayama, Shichiro, 1957, "Vergleichende Betrachtung der Kasus-Suffixe im Altjapanischen", *Studia Altaica*, Wiesbaden: Otto Harrssowitz
7. Thomason, S. and T. Kaufman, 1989, *Language Contact, Creolization, and genetic Linguistics*, University of California Press